

1 歴史文化の特徴① 交通がもたらした歴史文化

本市は、日本の中央に位置し、古くから関東・関西・北陸などの周辺地域との往来が盛んに行われてきました。それぞれの地域に至る街道が本市で交わり、ヒト・モノ・コトが「はいる・うけいれる」、「とどまる・うまれる」、「でる・ひろまる」ことで本市の歴史文化は形成されました。こうした「交通」による出入りや滞留によってもたらされた歴史文化は、本市の大きな特徴といえるでしょう。

(1) 塩尻の地へ「はいる・うけいれる」歴史文化

周囲を山に囲まれた塩尻の地ですが、市域の縄文時代の遺跡からは、他地域の特徴を持つ土器や和田峠周辺原産の黒曜石などが見つっています。また、弥生時代の柴宮銅鐸は、三河・遠江等の東海地方から搬入されたものであるとされているほか、平安時代の遺跡から見つかる緑釉陶器なども畿内から持ち込まれたと考えられています。こうした遺跡からの出土遺物は、古くより遠方との技術や人・物の交流・交易があったことを示しています。

江戸時代には街道や宿場が整備され、旅人や商人など様々な人々が塩尻に入ることによって、有形・無形の資源や情報が持ち込まれ、近代以降も鉄道の敷設や交通網の発達などによって、多くのヒト・モノ・コトが塩尻の地へ入ってきています。

このように、塩尻の地へ「はいる」もしくは塩尻の地で「うけいれる」ことで多くの歴史文化が生まれました。

(2) 塩尻の地で「とどまる・うまれる」歴史文化

平出遺跡は縄文時代から平安時代の長きにわたって営まれた大集落です。現在でも遺跡の周囲には集落が形成されており、5千年に及ぶムラとして存在し続けています。

塗櫛と漆器はいずれも江戸時代には奈良井の名産品として知られました。木櫛に漆を施す塗櫛は、18世紀中ごろ、伊那郡清内路村で櫛の製造技術を取得した中村恵吉が、奈良井宿で製造・販売したことが発祥とされています。また、奈良井・平沢で行われていた漆器業ですが、19世紀にはその主産地が平沢へと移り、現在も日本有数の漆器生産地として、伝統技術を受け継いだ職人たちが製作を行っています。塩尻の焼物である洗馬焼や信斎焼、入道焼は、幕末から明治期にかけて、それぞれ現地に築いた登り窯で陶器の生産が行われ、地元の焼物として定着しました。

市域の各神社で行われている、祭礼に伴う舞台・囃子等の催し物や三九郎などの行事は、古くより各地域で執り行われ、中には地域独特の伝統行事も存在しています。

多くの近代歌人が滞留し活動した広丘の地では、短歌の文化が芽生え、「短歌のまち」として文化の



市域を通る街道

醸成が図られています。

このほか、本市を含む長野県中南信地域に多く分布する本棟造の民家や、宿場町に建ち並ぶ出梁造の外観意匠を持つ町家などの建造物も特徴的です。

多くの街道が交差し、外界からの影響を受けやすい環境でありながら地域特有の歴史文化が育まれたことは、周囲を山に囲まれていたことで一定の固有性が保たれたことも要因であると考えられます。

このように、街道を通じて塩尻の地で「とどまる」あるいは「うまれる」歴史文化があります。

（３）塩尻の地から「でる・ひろまる」歴史文化

塩尻の地に「はいる・うけいれる」ことによって生まれた歴史文化や、「とどまり」あるいは「うまれた」歴史文化は、さらに塩尻の地から「でる・ひろまる」ことで発展を遂げました。

奈良井宿で製造された塗櫛は、土産物として宿内に置かれただけでなく、商人によって全国へと出荷され、江戸時代の女性たちの間で好評を博しました。平沢で生産された木曾漆器も同様に江戸時代に広く流通し、「木曾物」の名称で全国に知られるようになりました。漆器は太平洋戦争前までは行商を通した販路を中心に運ばれていましたが、戦後に木曾平沢が、重要漆工集団地の指定を受け木曾漆器の名前が全国に知れ渡ったことを機に販路を拡大、今日では海外にまで届けられるなど発展を遂げています。

本市のワインは、長年にわたるブドウ栽培農家や醸造家の苦悩や絶え間ない努力を経て、平成元（1989）年「リュブリアーナ国際ワインコンクール」にて、「シャトー・メルシャン信州桔梗ヶ原メルロー1985」が大金賞を受賞し、さらに翌年、「1986」も、二年連続で大金賞を受賞したことで世界的なワインの銘醸地としてワイン愛好家にその名が知られるようになり、本市のブランドワインとして世界中で親しまれています。

このように、歴史の中で育まれ、さらに価値の高いものへと昇華され、塩尻の地から「でる」・「ひろまる」歴史文化があります。